

食嗜好表現法からみた嗜好の構造解析

目白短大：〇矢野とし子，聖カタリナ短大：加藤みゆき，

大妻女子大家政：岡本 順子・大森 正司

<目的> 近年、日本においては平均寿命が急伸長を示し、我国の伝統的な食生活がその一要因として見直されてきている。しかし、現在は豊富な食材料が出回り、食が自由に選択されることによる、健康への様々な影響が認められてきており、健康と食の選択との関係が重要視されている。健康の問題を嗜好の構造を解析することで考察することにし、情報学的手法で分析した。今迄新しい食品、古い食品等について調査を行ってきたが、今回は伝統的な漬物であるタクアンやカットウヰ(キムチ)等を用いて嗜好調査を行い、その構造について解析を行ったので報告する。

<方法> タクアン、キムチ、ワカメラーメン、キムチラーメンを試料とした。パネルは大妻女子大学を主約600人を対象に、エリスの方法を参考に嗜好調査を行った。その際、嗜好尺度と共にその理由を記述させ、使用された形容詞、形容動詞的用語を抽出し、その出現頻度、共出現頻度、連関度を求めた。

<結果> ① 嗜好度はタクアン、ワカメラーメンについては全体的に高い嗜好性を示し、キムチやキムチラーメンでは形状、テクスチャーについて高い嗜好性を示した。② 使用語彙の出現頻度ではタクアンではク〜8個が多かったが、キムチでは6〜7個であった。③ 嗜好に関連する語彙の出現頻度では、タクアンについては「歯ごたえがある」「ほりほり」「ぱりぱり」などテクスチャーを示す語彙が多いのに対して、キムチについては「辛そうな色」など、色や辛さという味についての語彙が多く認められた。ワカメラーメンは普通、好き、などという一般的な語彙が多く認められた。